

小児の50人に1人の割合で 起こる「弱視」を

スポットビジョンスクリーナーで

早期発見しよう！



最近、眼鏡をかけている幼児が増えています。これは弱視予防のためであり、早期からの対策により予防できます。弱視になると治療しても視力が戻らず、その後の生活に影響を与えます。



◆弱視の原因◆

弱視の原因は、近視、斜視など様々ですが、最多は遠視です。

遠視は近視と異なり、一見問題にならないようですが、

実際には近視よりも大きな影響を及ぼします。

近視では近くにピントがあう場所がありますが、遠視ではどの場所にもピントがあわないため、視力の発達を大いに妨げる要因となります。

◆スポットビジョンスクリーナー◆

弱視のリスクである屈折異常・遠視・近視・乱視・斜視がわかるスポットビジョンスクリーナーという乳幼児専用の機械がありますが、あまり普及していないため子供の遠視の多くが見逃されています。

生後6か月から検査が可能で、お母さんに抱っこして座ってもらい、機器の画面を約1秒ほど見てもらうだけで測定でき、痛みなどの刺激は全くありません。

3歳まで（できれば1歳6か月まで）に視力検査を受けることが望ましいです。当院で予防接種を行う赤ちゃんには、生後10か月頃にこの検査を行っております。

検査の結果、より精密な検査が必要と判断された場合は、ご相談の上、適切な医療機関（眼科）に紹介いたします。

◆早期発見と早期の治療が必要◆

視力が発達するためには、きちんとピントがあう状態が不可欠です。遠視では、眼の奥にあるスクリーンのような役割をする網膜に、ぼんやりとした画像しか届かないため、3歳まで放置すると脳で画像を認識することができなくなり、弱視になります。

弱視は発見が早ければ早いほど、治療に反応しやすい疾患ですので、弱視および、弱視のリスクとなる異常は早期発見することが大切です。

